湯治場の哲人

中川善史

1

明治三十六年、藤村操なる一高の学生が宇宙や人生を「不可解」と断じて華厳の滝に身を投じてからの数年、青年の間に哲学的の煩悶というものが麻疹のように流行った。人生とは何か、人間如何に生くべきかと悩み悶えるのである。

気が付いてみると自分の周囲の友人もすべからく煩悶病に取り憑かれており、そうでないのは自分と、友人間で最も軽薄とみなされていた妄亭という男だけだった。

自分は焦った。妄亭の同類には見られたくない。煩悶党の同志となるほうがましであると考え、哲学書を相手に昼寝をしてみたり、禅寺に通って公案と相撲を取ってみたり、つまりは煩悶のまねをしているうちに、本当に神経が衰弱してしまった。

顔色が悪くなり、呼吸が浅くなり、手が震えだした。そればかりか、幻を見るようになった。女の幻である。背の高い後ろ姿のきれいな女がすっくり立っているのだが、声を掛けたり手を伸ばしたりすると、ふと消えてしまう。こりゃ華厳の滝も近いわい、と心配になって友人に相談してみた。

「そりゃ、君、狸にでも化かされているんじゃないか」と言ったのは、妄亭である。自分が不服そうな顔をすると、

「そうでなければ、新手の色情狂だ」

他の友人は、知っている温泉宿があるから、そこへ行ってしばらく療養するがいい、大勢の人間や電車や人力の行き交う東京は君の神経に悪い、と言ってくれた。もちろん、自分は妄亭の意見を棄て、こちらに有難く従うことにした。

どんよりとした空が続き、濃い緑を雨が濡らしている時期だった。詰まらなそうな顔をして雨を眺めながら湯に浸かって過ごした。

夜は、何も見えない闇の中で雨の音だけを相手に過ごした。東京の喧噪も自分の神経を逆こぎにするが、この重たい闇も自分の心を左官屋のように塗り込めてしまう。

しょうことなしに掛けてあった手拭いを取り、風呂へ向かうと、洋燈ひとつが灯る薄暗い湯船の中にむこう向きに、あの女が立っていて裸の背中を見せていた。自分は、また神経衰弱がぶり返してくるのを感じ、部屋に戻ると布団を被った。

あの女は、何かの象徴か、神経の作用か、狸の悪戯か、新手の色情狂か。また煩悶していると夢の中に女が出てきた。仰向けに寝ている自分に覆い被さるようにしてこちらを見下ろしているが、その顔がわからない。これを見定めれば、新たな境涯が生まれる、と信じて一心に睨みつけていると、その顔がじじいの顔に変わった。

ぎゃっと叫んで起きてみると、もう日はだいぶ高くなっていた。珍しく日が差しているようだ。

夢だった、夢だった、と思っていると、肝心のじじいの顔がいつまでも消えない。つるつるの大きな頭に銀縁の眼鏡、山羊のような白い髭を生やしたじじいである。

「だいぶ、うなされておったな」

と、じじいの顔が口を聞いた。もう消えないつもりと見える。

「わしは、お隣に泊まっているものじゃ。ひと風呂浴びようと思って廊下に出たら、

障子の向こうから、うんうんうなる声が聞こえたもんで病気かと心配して入って来たのじゃ。どうじゃ、一緒にひと風呂」

風呂場には誰もいなかった。窓外の木の葉が雨の露をきらきら光らせている。湯気が明るい朱の光を受けてゆらゆらしている。

じじいに問われるままに、自分が学生であること、哲学上の問題を抱えてここにやって来たことなぞを、なるべく日の光を横顔に受けて哲人らしく見える角度を考慮しつつ、さりげなく喋った。じじいは、

「そういえば、しばらく前に一校生が自殺して、そのまねごとをする若い者が絶えないと新聞に載っておったな」

と言った。図星だった。狼狽した自分は、話題を変えようとして思わず、

「この湯に女は入りますか」

と「新手の色情狂」的なことを口走った。もちろん、そういうつもりではなく、昨晩、湯船で見た女の幻の真相を考えようとしたのである。

「なに、湯治の婆さんばかりじゃよ。もっとも夜遅くには宿の女中が入るかもしれんがな」

なんだ、女中だったのか……と、納得もし、安心もし、がっかりもした。あの幻は温泉場まではついてこなかったと見える。

「若い人は、一心に思い詰めるからのう。少し、ここでのんびりしていくがよい」

湯船に差し込む柔らかい光りのせいか、そういうじじいの顔が、その薬缶頭や山羊髭のせいもあるのだろうが、大慈悲の高僧のように見えた。自分は哲人の前で哲人ぶって見せていたのだ、と急に恥ずかしくなった。これから、この人を心の中で老師と呼ぶことにした。

湯を上がって、飯を食い終わると、老師が碁を打ちにきた。

自分はへぼであるがが、妙な煩悶にとらわれているよりはいいと思い相手になることにした。

それに、高徳の哲人と碁盤を囲むのは、なにやら雅な趣がある。自分が南画の世界に入り込んだような気がする。何より退屈しのぎになる。

初めの数手を見るに、構えが大きく懐が広いように思えた。しばらく進むと、今度は奇手が連続した。仙界より現れ出でたような思いもつかない手である。

自分はどう対応していいかわからなくなり、仕方なく出鱈目なところに石を置いてみると、老師は鋭い目でこちらを睨んだ。まるで、心の中を見透かされているようで「どうせ打つなら、一手たりともゆるがせにせず、真剣に打て、と諭されているようだった。

老師は囲碁を通じて、宇宙の大哲理を教えてくださろうとしているにちがいない。負けるにしても堂々と負けなければならなぬ。それから尋常に勝負していって、予想通り負け……と思ったら勝ってしまった。普通なら取れるはずのない地を次々に取って逆転してしまったのである。

これは、わざと勝たせてもらったのだろうか、と老師を見ていると、悔しそうに、ああすればよかった、こうすればよかった、とぶつぶつ言っている。

「先ほど、私が打った後、私の顔を睨みつけておられたように思いますが」

聞いてみると、しばらく考えていたが、「ああ」と言って、

「いや、君のおでこに蠅がとまっていたんで、叩くべきか否かと迷っておったのじゃよ」

結局のところ、老師は、自分に勝るとも劣らないヘボ碁であることが判明した。

しばらくして、自分は宿の飯でなく、自分で米や味噌や野菜を買って自炊することにした。

野菜を煮たので飯を食おうと思っていると、呼んでもいないのに老師が茶碗と箸を持って入って来て、

「お相伴つかまつる」

と言うなり勝手に食い始めた。禅の公案には、いきなり人の頭を引っぱたくような乱暴な坊さんがいっぱい出てくるが、これもそれに劣らず乱暴である。

「君が自炊を始めると聞いて、作れるのかと心配しておったんじゃよ」

と、もぐもぐ口を動かしながら言う。

「飯がまずいと、身体をこわして神経衰弱をぶり返しかねんからな。これなら、大丈夫。ああ、飯をお代わり。うん、自炊しようという意欲が出てきたこと自体、よくなっている証拠じゃな。第一、自炊は経済によろしい。そういうことにも頭が働かないと天下国家を背負う人物にはなれんぞ。ああ、うまかった。ごちそうさま」

それから、老師は毎日飯を食いに来た。経済上、一番助かっているのは老師ではないかと思われた。悔しくなった自分は、部屋に食い物を持っていかないで、湯治客の自炊用台所の隅で飯を食ってしまってから部屋に戻った。

部屋では飯茶碗と箸を持った老師が涙ぐんだまま座り込んでいた。

ある朝、風呂に誘おうと老師の部屋を覗いてみると、荷物がすっかり片づいて

掃除が終わっている。がらんとしたのを見ながら、女中に老師はどうしたのかと聞くと、

「昨日の晩、馬車でお発ちになりました」

自分は唖然とした。せっかく仲良くなったのに、随分とつれない仕打ちであると思った。同時に、あの御仁が何者であるか、全く知り得ていないことに今更ながら気づいた。碁石の数を誤魔化されぬよう監視したり、飯のただ食いを如何に防ぐかに忙しくて、そういうことを聞きそびれていたのである。

「あら、お客様は、お孫さんでいらっしゃるんでしょう」

と女中が言う。自分がきょとんとしていると、

「宿代は孫が万事、心得ているからとおっしゃってお発ちですわ」

と言いながら、一通の手紙を渡した。中を見てみると、「孫へ。以下ノ支払ヒ方ヨロシク頼ム。祖父」とあって、法外な金額が書いてある。驚いて、

「こりゃ困る」

と言った自分の鼻先に、もう一通女中が手紙を出してくる。それには、

「嘘ダヨ。祖父」

とあった。

脳髄が錐もみになったようなわけのわからん状態で立ちつくしていると、女中はにやりと笑って「失礼しました」と向こうに行ってしまった。

その後ろ姿を見送って、「あっ」と思った。あの女中の後ろ姿、幻の女にそっくりである。どうやら、自分の神経衰弱は妄亭の言った如く、狸か狐に化かされたものらしい。

午後、何もなかったような顔をして、老師は碁を打ちに来た。のみならず一目

いくらで金を賭けよう、と提案してきた。

2

湯治場で神経衰弱の療治をしていると、東京から友人が手紙を送ってくる。A君は、ハムレットなぞを持ち出して、「生きるべきか死すべきか」と哲学的煩悶の心情を綿々と綴ってくる。

そこで、「飯を食って寝て厠に行くを繰り返していれば、生きるのは難しからずと存じ候」と返事を出した。なんとなく、ここへ来てから老師に感化されたような気もする。

B君は、自分が女の後ろ姿の幻影を見るのを羨ましがっている。「僕も幻の女を見たい。できれば、後ろ向きでなく前向きで。できれば美人がよい。できれば

裸体がよい。だが、これは色情的の意味で言うのではなく、あくまで理想的の美を追及する意味で言っているのだから誤解しないでくれ給え」

立派な「新手の色情狂」である。こんなやつに東都にうろうろされては困る。「妄亭に相談し給え」と返事を出した。

第三の手紙は、まさしく、その妄亭からである。

「小生モ明治ノ青年タル証拠ニ、近頃ハ哲学的ノ問題ニ煩悶致シ候」とある。ほう、と思って続きを読む。「小生ノ逢着シタル問題ハ『何故、鰻ト梅干ハ食ヒ合セナルヤ』ト云フ、ソクラテスモ考ヘザル大問題也。小生、愚考スルニ、鰻ガ梅干シノ酸ニヤラレテ、腹中デノタ打チ回ルガ原因ナランヤ。敢テ、コレヲ妄亭ノ第一仮説ト名ヅクルニ至ル……」

こいつは鰻を丸のまま飲み込むのか。返事は出さなかった。

「先生のお若い頃は、如何に生きるべきかという問題に悩むことはなかったのですか」

自分は、友人達の手紙を紹介しながら、老師に聞いてみた。いつの間にか、老師を先生と呼ぶようになっている。

「ないね」と老師はあっさり云う。

「迷わなかったのですか」

「わしは、こう見えても旗本の倅じゃ。侍の子供は侍になる以外、考えないさね」

言われてみれば、老師は旧幕時代に青春を過ごしたに違いない。まだ、刀を差したり、ちょんまげを頭に載せた人が、その辺を歩いていた時代である。

「むしろ、ご一新の時じゃな、大変だったのは」

そういえば、明治になって禄を失った武士の「士族の商法」などという笑うに笑えない悲喜劇の話はよく聞く。

「いやいや、わしは商売なぞは考えなかった。上野の山に立てこもった組じゃよ」

自分はびっくりした。明治元年、新政府に従うのを潔しとしない旧幕臣が薩長と戦った上野戦争である。そのようにはとても見えない。

「徳川様の恩に報いなければならん。薩長にも、ひと泡吹かせてやりたい。なにより、武士として自分の死に場所を捜さねばならん」

老師は瞑目しつつ語る。おりから日露戦争の頃である。自分は粛然として座り直した。

「だが、相手は装備が違う。最新式の銃に大砲じゃ。まわりで同志が、ばたばたと倒れていく。最早これまでと、わしは若い者に落ち延びて会津に行けと命じてから、弁慶よろしくアームストロングという大砲の前に仁王立ちじゃ。そのまま立ち往生するつもりじゃった」

「……」

「大砲が火を噴いたまでは覚えておる。新式兵器のなんという威力であろう。わしは、その弾に吹き飛ばされてしまっての」

「はい……」

「気がついたら、筑波山まで飛ばされていた」

「……？」

なんだか、話がおかしくなってきた。

「まあ、今更、江戸、いや東京か、東京に帰るのも忌々しくなってな。筑波山の天狗に弟子入りしたじゃ」

「はあ」
「そこで、天狗の団扇の製法を教えてもらってのう。これを売り出したら大当たり、いや、儲かったの儲からないの、笑いが止まらん」
　死に場所を求めて上野山に立て籠もった人の言葉とは思えないが、自分は一応聞いてみた。
「天狗の団扇というと、空を飛べるとか言う？」
「いやいや、そんなつまらんもんじゃないよ」
「では、天狗の眷属を呼び集めるとか言う？」
「そんな無風流なもんじゃないよ」
「すると……？」
「それを使って、あおぐとな……」
「……あおぐと……？」
「風が来るんじゃよ」
　自分は二度と老師の話をまともに聞くまいと心に決めた。

「お目覚めあって然るべし」
　目を明けると、すぐそこに女中の顔が見下ろしている。例の幻の女の女中である。自分は、どきんとして飛び起きた。
　青年に朝寝をさせておいてはいかん、という老師の言いつけで、毎朝起こしに来る。しかし、ぬれ手拭いで顔を撫でたり、鉄瓶を額に載っけたりと、ろくな起こし方をしない。そのたびに、自分は豚に顔を舐められたり、帝釈様に踏んづけられたりという夢にうなされる。

顔を洗ってきてから、掃除をしていた女中に、
「お隣のご隠居は、どういう人なんだい」と聞いてみた。
「山のお寺のご住職の紹介で、ここに来たんです」
「お寺があるのかい」
「そりゃ、人が死ぬところには、どこでもありますわ」
一度お寺を訪ねてみるのも良かろう、と思った。俗塵を離れたところの坊さんに仏道について話を聞くのも悪くはあるまい。住職のことを聞いてみる。
「はあ、それは、もう、お酒と博打が好きで、隣のお爺さんも時々出掛けていっては、賭け碁をしてくるそうです。それも、軍艦一隻買えるくらいの金額を賭けて」
自分は、高僧と清談をするという希望をただちに放棄した。
「二人は、そんな金を持っているのかい」
「持っているものですか。払うつもりがないんですわ。この間なんか、軍艦三隻分の借りが出来てしまったって言っていましたから」
「なんだ、馬鹿馬鹿しい」
「いずれは勝った金で軍艦を国家へ寄付し日露の戦役に貢献するつもりである。自分ほどの愛国者もあるまい、とか言っていました」
どうも老師の駄法螺にはきりがない。

「あのお爺さんは東京の大きなお店のご主人だったのですが、今は息子に跡を譲って隠居しているんです」
「僕には、元は旗本だって言ってたぜ。上野の山の戦争に行ったんだって」
「あら」

「大砲で筑波山まで飛ばされて、そこで天狗に団扇の作り方を習って、それが大売れに売れて……」
「いやだわ、書生さんともあろう方が、天狗だのなんだのって、そんな旧弊なことを信じるんですか」
「いや、信じるわけじゃないが……」思わず、たじたじとなる。女中は続ける。
「少なくとも明治になってからは、真面目に一生懸命商売をして、店を大きくして、家族にも奉公人にも贅沢は一切させず、自分も一切せず、石部金吉と人から言われるほど堅くって、冗談も嘘も悪戯も大嫌い……」
「それは、別の人の話じゃないのかい」
「本当です。それで、隠居してからのある日、孫娘の手を引いて浅草の観音様に参詣したんです。すると、遥か上空から一羽の無責任そうな顔をした鳩が飛んできて、お爺さんの禿頭に止まって……」
「鳩にも無責任なのがいるのかい」
「そりゃ、鳩にだって真面目なのもいれば、そうでないもいますわ。ところが、その鳩がとまった途端に、お爺さんの頭と鳩との間に電流が流れて、ぼんっという大きな音がして煙が立って……それで、煙が晴れた時、お爺さんの頭の上の鳩はきりっとした顔になって、お爺さんの方は、なんだかへらへらした顔になっちゃって、それから、前と人柄が変わっちゃったんです」
「鳩と人格が入れ替わったのだろうか」
「なんせ電気が走ったんですから」
「ちょっと待て。君は、なんでそんなに克明に知っているんだ」
「だって、見ていたんですもの」

「見ていたって、君がその鳩か？」
「まさか。その時、お爺さんに連れられていた孫娘が、私なんです」
「嘘つけ」
「嘘じゃないわ。その証拠に、今でも浅草には、真面目な鳩の子孫がいて、市中の見回りをしているのよ……ハトロールっていうんですって」
「馬鹿なことを言うんじゃない。そんな大店の娘さんが、こんな山奥で女中をやっているわけないじゃないか」
「何故？やりたければやるんじゃなくて？」
そう問い返されると、何故なのか自分でもよくわからない。苦し紛れに、
「だいたい、家族が許すはずが……」
そこまで言いかけて、あの老師だったら何をやるかわからないと思った。いや、それは老師が本当に家族だったらの話だ、と打ち消した途端、そういえば、この女中も、あまり山出しの娘という感じがしない、自分が幻の女と取り違えるくらいだから、案外、都会の女なのかもしれない、という気がしてきた。
「いや、違う、違う、違う」
「何と何が違うの？」
何と何が違うんだろう。老師や女中の話はどこまでが本当なんだろう……。朝っぱらから、頭がごちゃごちゃしてきた。神経衰弱がぶり返しそうだ。
女中は、さっさと掃除を済ませてしまうと、「失礼しました」と言ってにやりと笑った。そして、幻の女の後ろ姿をちらりと見せて行ってしまった。

3

東京の友人が雑誌を送ってきてくれた。『東京トホホギス』という雑誌で裏目送籍という英文学者が書いた「我が輩は梃子である」という小説が評判である。梃子の眼から見た人間社会を批評するという目新しい趣向の小説を読んでいると、廊下に足音がして、女中が来客を告げにやって来た。

「誰だい」

「山のお寺の小坊主さんです」

そのお寺の住職は、飲んだくれの上に、隣の老師と時々、軍艦何隻分かの金を賭けて碁をやっているらしい。あまり、まともな人物とは言えないだろう。

「いないと言ってくれ」

「もう来ています」

女中の陰から、小さな青い頭の小坊主が顔を出した。こうなれば、仕方なく応対する。

「なんだね」

「いえ、私は、おまんじゅうやお団子の方が好きなのでございますよ」

いきなり、わけのわからない答えが返ってくる。返事も相槌も返しかねていると、

「でも、和尚さんがやれとおっしゃいますものですからね、梅をまず、塩に漬けるのでございます。といっても、熟していない梅や虫が食っているのは除けるのでございますよ。そして、梅酢が上がってきますからね、そろそろかな、と思っていると、だんだん、いいお天気が続くようになってきましたから、庫裏の前に

筵を広げまして、ここに朝からせっせと梅を並べて干しまして……」
「君は梅干しの製造法を教えるためにやってきたのか」
「いえ、やっと並べ終わりまして、やれやれ用事も済んだから、昼寝でもしようか猫と遊ぼうかと思っていましたところへ、和尚さんがやって参りまして、おい、温泉宿に東京の書生が逗留しているらしいが、暇だから、そいつでもからかってやろうと思うんだが、ちょっと連れてこい、あ、本人の前ではこんなことを言っちゃいけないぞ、学問や東京のお話を伺いたいからご光臨いただければ有難い、と言って無理矢理引っ張ってくるんだぞ、と言っておりますが、来てくれますか？」
「本人とは誰のこったい」
「あ、あなた……そこは聞かなかったことにしてください。私は、ついつい余計なことまで喋っちゃうんですね」
「ほとんど余計なことしか言わないじゃないか。なんで和尚が呼んでいるというのを梅干しの話から始めなくちゃならないんだ」
「そういうわけで来てください」
「誰が行くか」
「それでは、無理矢理引っ張ってこいと言いつけられましたので」
と自分の手を引っ張ろうとする。こんな小坊主に負けるわけがない。すると、小坊主は女中に向かって、
「よろしく御助力お願いします」
「合点だい」
女中（例の幻の女の女中だが、煩雑なので幻子（げんこ）と呼ぶことにする）が、

一緒になって自分の手を引っ張り始めた。いくら二人がかりとは言え、相手は女子供だ。うん、と足を踏ん張ってこらえたところへ、
「とうっ」
幻子の足払いが飛んできた。不覚にも尻餅をつくと途端に目の前が真っ暗になって……。

「はい、和尚様。女中さんの見事な技で書生さんが転んだところで、見ると床の間に花瓶がありましたから、それで頭を殴りますと、きゅっと言って気を失ってしまいました。あとは階段を蹴落として、飯炊きの権助に頼んで荷車に乗せてもらい、寺まで運んできたのでございます。権助さんというのは、力がお強いですねえ。牛をかつぎ上げるのだそうですよ。こんなやせっぽちの書生さんなぞ、西瓜みたいに荷車に放り投げて、あ、そういえば西瓜といえば……」
べらべら喋る小坊主の声が聞こえる。後頭部がずきずきする。身体のあちこちが痛い。こっちが気を失っているうちに、ひどい目にあわされていたようだ。
別の野太い男の声が聞こえてくる。
「そうか、そうか。ちっちゃいの、お前も、だいぶ禅の機峰がわかってきたな」
どうやら、ここは山の寺で、この声は住職のものらしい。機峰だかなんだか知らないが、こちらは殺されかねなかった。というよりも、生きているのが不思議なくらいである。
「ほほう、この難物をよく連れてこられたの」と、別の男の声がする。言わずと知れた老師の声である。
「で、どういたしましょうか」というのは、幻子の声だ。どうやら、温泉宿周辺

の変人が集結しているらしい。これは、下手に目を覚ますと、またわけのわからない話に巻き込まれそうである。気絶した振りをしておいて、隙を見て逃げ出そうと考えた。

「どういたすとは、知れたことよ……」

住職の声が一段、低くなって、底に厭な迫力がこもった。

「身ぐるみ脱がせて皮を剥ぐのよ」

自分の耳を疑った。いくら変人達とはいえ、山賊や山姥のような残酷なことをやる連中だとまでは思わなかった。

「大釜に湯をぐらぐら沸かして、その中に叩きこんじまえ」

「それもいいが、まだ若いようだから、このまま炭火に突っ込んで焼いてしまうというのも乙だぞ」

これは、こうしてはいられない。殴られたり放り投げられた挙げ句、煮殺されたり焼き殺されたりしてかなわぬ。化けて出たところで、この連中では、とても怖がってもらえないような気がする。

逃げると決心して、ばねのように跳ね上がると、縁側の方へ向かって飛び出した。

「ていっ」

そこへ、また幻子の足払いが飛んできてひっくり返された。この女、どこでこんな技を覚えたのだろう。

「おう、書生さんが目を覚ました」

と、山賊にしてはのんびりした調子で和尚が言った。でっぷりと肥えた、まみえの太い男である。

「皮をむいてゆでることにしましょう」
と、幻子も山姥らしからぬおっとりとした言い方で山姥としか思えないことを言う。だが、よく見ると座っているその膝の先に笊に入った山盛りの空豆があった。木々の緑がしたたり落ちたような、鮮やかな緑色だ。
「そうじゃな。おい、ちっちゃいの、湯を沸かしなさい」
「煮るだの焼くだのといっていたのは……？」
自分が訝しげに聞くと、
「うん。うまそうな空豆をたくさんもらったのでな。書生さんにも食べさせてあげようと思って呼んだのじゃ。井戸には、これも貰い物じゃが恵比寿麦酒が冷やしてあるぞ」
自分は、へなへなと座り込んでしまった。
「呼んでいただくのは有難いが、もう少し穏やかなやり方はないものでしょうか」
「すまんすまん、禅坊主というのは、どうも荒っぽくなりがちでな」
太い眉の下で細い眼が微笑んでいる。幻子の話から、とんでもない生臭を想像していたが、その笑顔はなんとも、人が良さそうである。まあ、幻子の話だって、一から十まで本気に取る必要はあるまい。なにしろ、浅草寺で老師と鳩の間に電流が流れて、人格が入れ替わったなどという話を平気でする女なのだから。
そんなことを考えていると、
「四じゃな」という老師の声が聞こえた。「五」と和尚の声が続く。
「君はどうかな」
二人が、こちらを見ている。なんのことかわからずに、ぼんやりしていると、
「なに、思いついた数を言えばいいんじゃよ」

そこで、「七」と続けてみた。
「三」「四」と二人が続いて、またこっちを見ている。思いついた数を言えということなので、出鱈目に「百」と言ってみる。
そんなことが延々と繰り返される。自分はついに耐えきれなくなって、
「あの、これは、なんの遊びなんでしょうか」
「なんじゃ、わからずにやっていたのか。空豆の莢に入っている豆の数の当てっこをしてたんじゃよ」と、老師が顎で幻子の手元を示す。幻子の白い指が動くと、大きな莢の中から綿毛にくるまったような豆がころころと出てくる。
「君は、もう軍艦一隻分くらい負けているからね」と和尚が笑いながら言う。「なにしろ、百とか万とか途方もない数を言っていたからなあ、あっはっは」
あっはっは、ではない。
「金を賭けていたんですか」
「まあ、いいよ。東京へ帰るまでに払ってくれれば」
さっき訂正されたばかりの和尚の印象が、またひっくり返された。本当に東京に帰りたくなってきた。だが、帰る時は、老師と和尚に勘づかれないように出発しなければならない……幻子にも……。
その午後、自分は琥珀色の麦酒と愛らしい薄緑の空豆と木々を渡る風に陶然とし、小坊主の脱線ばかりのおしゃべりに呆然とし、幻子の現実離れした話に唖然とし、老師と和尚の俗の上にも俗なる会話に愕然として過ごしたのであった。

4

東京へ帰ろうと思った。

哲学上の煩悶から来る神経衰弱は、だいぶよくなった。もちろん、哲学的の疑団が氷解したわけではない。なんだか忘れてしまったような気がするし、もともと、そんなものはなかったような気もする。

それよりも、ここで老師を初めとする変人に取り囲まれていたのでは、別種の神経病になりそうな気がする。

帰京を老師と幻子の前で宣言し、翌朝、馬車に迎えに来てもらうよう帳場に頼んだ。東京へ帰るには、まず軽便鉄道の停車場まで行き、そこから幾つか汽車を乗り継がなければならない。

老師と幻子は名残惜しそうにしていた。もちろん、からかう相手がいなくなるのが惜しいと顔に書いてあった。

翌朝来たのは、なんと「村内名所巡り」という名の馬車だった。ははあ、老師か幻子が手を回したなと思ったが、そこは落ち着いて、名所巡りはいらないから、軽便の停車場までやってくれないか、他に客もいないようだし、金ははずむ、それがお互い一番いいじゃないか、と交渉に掛かった。

ところが、この御者がいやに片意地な男で、

「なに言いますだ、お客さん。おら、この名所巡りの案内を天職だと思っとりますだよ。命を賭けておりますだよ。お客さんの事情がどうあれ、おら、案内するつもりで来ただ。こうなったら、どうでも案内されてもらわないでは収まらねえ。

金はいらねえから、腕にかけてでも、名所巡りしてもらうだ」
と、強引に馬車に引きずり込まれた。
「金返せ地蔵」というのを見せられた。昔、行き暮れて難儀した旅人が、この地蔵の前を通りかかり、供えられた賽銭を見て、「お地蔵さん、どうか、俺を助けてくだせえ。ちょっくら、このお賽銭を貸してくれろ。必ず返しに来ますだから」と伏し拝んで持っていったところ、夜中に地蔵が「金返せ～」と言ってやってきて旅人を悩ませた、という故事があるそうである。
「成仏団子」というのを食わされた。昔、さる旅の高僧がこれを食って喉に詰まらせて、たちまち往生した、という由来があるそうである。
「どっちつかず峠」というのにも連れて行かれた。昔、さる武将が武田方につくか上杉方につくか悩んで、この峠に立って小便をして、それがそよいでいった方につこうと占ったところ、自分に引っ掛かったので、どちらにもつかなかった、という物語があるのだという。
他にも色々行ったが、覚えていない。というより、忘却しようと努力している。
夕方、何事もなかったかのように宿に着いた。老師も幻子も、なにもなかったかのように迎えた。

老師や幻子に知られたのが悪かったのだ。謀り事は密なるを以て善しとす。自分は、今度は、二人に見つからないように帳場に行って、番頭に翌日立つことを告げ、支払いを済ませた。そして、このことは他の客や女中には話さないでくれと頼んだ。馬車は、と聞かれて、慌てて首を振った。思わず、ばれたらどうする、と言うと番頭が不思議そうな顔をした

その間、始終、幻子が傍にいないだろうなと気にしていた。なんだか、悪事をしているような気がする。知らず知らず目つきが悪くなっているような気がする。

ともかくも、その晩は無事に食事も済ませ、早めに床を取らせて寝についた。あとは、朝、幻子が起こしに来る前に目を覚まして宿を出るだけである。

気疲れしたせいか、すぐに眠りに落ちた。翌朝、いつもより早く目を覚まし、しめしめ、早々に顔を洗って着替えて、とばかりに立ち上がると、足を取られるようにしてひっくり返ってしまった。

見ると足首に紐が結んであって、その先が障子の隙間から外に出ている。さらに、廊下を伸びて階段の方へ消えていっている。

なんだろうと思うと、とすとすと階段を上ってくる足音が聞こえてきて、紐をたぐりながら幻子が姿を現した。幻子の足首に、その紐の片端が結んである。

「おはようございます。なんだか、今日はお客さんがなにか考えているような気がして、工夫しました」

なにか心霊的の能力でもあるんじゃないかと思うほど勘がいいやつだ。こうなっては仕方がない。正直に自白した。

「僕は、今日東京へ帰る」

「あら、まあ。ご隠居様～」

と、向こうは老師を加勢に呼ぶ。

「そりゃあ、残念だなあ。お名残惜しい。ひとつ、停車場までお見送りしようじゃないか」と老師が騒ぐ。

「では、私も、お荷物などお持ちします」と幻子が続く。

二人に付いてこられたのでは、また何をされるかわかったものではない。

「いや、見送りは結構です。荷物もカバンひとつだけですから、持ってもらうほどのことはありません」
と、自分はきっぱりと断った。

きっぱりと断ったはずなのに、林の中の道を老師と幻子と並んで歩いている。見送られていると言うよりは監視されているような気がする。
カバンは幻子の手の中にあり、これも人質を取られているような気がする。
「もう、この辺までで結構です。あまり、無理をされるとお体に触りますでしょう」
「なあに、これくらいの道なんでもないさ。わしは、幕末維新をくぐり抜けてきたのだもの。現代のひ弱な青年とは鍛え方が違う。これでも、一刀流の免許皆伝だ」
「一刀流は関係ないでしょう。誰かに狙われているわけでもあるまいし」
「いや、おおありさ。まず、あの山寺の和尚だ。賭の金を、必ず払わせてやると息巻いていたからな。あの生臭坊主から純真な青年を守らねばならん」
思わず、あなたも同じ穴の狢だろうと言いたくなる。
「まだあるぞ。村内名所巡りの馬車だ」
「僕は、もう乗りましたよ」
「いや、あいつはあれに異常な執念を燃やしているからな。客がいないと、その辺をふらふら歩いているのを連れ込んで、嫌がるのを無理に案内してしまうというぞ」
「現に、湯治のお客さんで、もう三回も成仏団子を食べさせられた人がいます」
と幻子が補足する。まったく、無法地帯のような湯治場だ。

本当は、和尚よりも御者よりも、老師と幻子がなにをやらかすか不安だったのだが、何事もなく停車場に着いた。はて、本当にこの二人、見送りに来ただけなのかと不思議になる。

そのうち、線路の向こうに細い煙が見え、軽便鉄道の列車がやってきた。一台の機関車が一両の客車を引いているだけのちっぽけなもので、馬車の馬が機関車に変わっただけにしか見えない。その機関車も、馬というよりはロバと言いたくなるような頼りなげなものである。

だが、そんなことよりも、驚いたのは機関車の運転台に乗っていたのが、あの山寺の小坊主だったことである。客席には、おばあさんが一人だけ座っている。座っていると言うより、気を失っているのである。

「女中さん、活を入れてやってください」

「心得た」

幻子がおばあさんの後ろに回って、どこかを押すと「ひっ」と言っておばあさんが飛び起き、年寄りとは思えないような速さでどこかへ駆け出していった。自分は小坊主に、

「なんで君が運転しているんだ」

「はい、そうなんでございますよ」とやつは喋り始めた。

「機関手の吾作さんがですねえ、『東の畑の婆さんが、明日、ラッキョウ漬けたのを一樽くれるっちゅうんで取りに行かなきゃいけねえべが、汽車の方はどうするかのう』といっておられたんですが、そこにおられるご隠居が『山寺の小坊主が、どうせ遊んどるじゃろう。あれに、やらせたらいいじゃろう』『小坊主さん、汽

車動かせるかのう』『そりゃあ、経も読めるし梅干しも作れるんじゃ。汽車くらい、動かせんこともなかろう』ということで、私が動かすことになりましたんですが、私、乗ったことさえあまりありませんのに、動かすのはどうかと思っておりましたが、不思議でございますねえ、手当たり次第に石炭くべたり、目の前のものを押したり引いたりしているうちに、これも仏様のお導きでございましょう、動き出しましてねえ」

　これが老師の企みかしらんと思った。

「ちゃんと運転できたのかい」

「ちゃんとかどうか……。さっきも、カーブを曲がる時、速度の落とし方がわからずに、車輪が半分宙に浮いておりましたし。それから、線路の真ん中で牛が昼寝をしているのを見つけましたですが、止まり方がわからず、思わず両手で目をふさいでしゃがみ込みましたでございますよ。そしたら、どういうわけか、直前で止まってくれまして、これも、ずっとお経を唱えていた御加護がございましたか」

　おばあさんが気絶していたわけがわかった。

「すると、この汽車は、仏のお導きで動いているというわけかい」

「はあ、おっしゃるとおりでございます。誠に、御仏のお慈悲は広大無辺でございますから」

　もう少し科学的の根拠に基づいて動いていて欲しかった。

「では、書生さんの前途を祝して、ばんざーい」と、後ろで老師がはしゃぐ声が聞こえる。

「ばっざーい」幻子も後に続く。

自分は二人の方を振り向いていった。
「帰京は、明日に延期することにします。いくら僕でも命が惜しいですから」
「これだから、明治生まれの青年は軟弱で困ると言うんじゃ。わしなんぞは、幕末維新のあの時代を……」
西郷だろうが大久保だろうが、この汽車には乗りたがらないだろうと思う。
小坊主が老師に話しかけている。
「そういえば、機関手の吾作さん、『明日も、西の谷の茂作どんがカボチャを百ばかりくれるちゅうだで取りに行かなきゃならんが、汽車の方はどうすべいかのう』とおっしゃっていましたが、明日も私が動かすのでございましょうか」
自分の帰京の予定は、当分立たないような気がしてきた。

5

「速達です」
と幻子が葉書を持ってきた。妄亭という学校の友人からである。一高生・藤村操氏の自殺の後、友人間で唯一、神経衰弱と縁のなかった人物である。
「本日、到着。オ迎へニハ及バズ。〇月〇日於T駅。妄亭」
要するに、彼が今日、ここへ着く予定を途中の駅から知らせてきた葉書である。
「ほう、着いたかい」
と自分の目の前に座っている妄亭が言う。
「やはり、いくら速達とはいえ、僕の方が早かったね。なにしろ、投函してすぐ汽車に飛び乗ったものだから」
「さっき突然、君が現れた時にゃびっくりしたぜ」
「いやあ、その速達を出したし、数日前には君の神経衰弱お見舞いかたがた僕も保養に来る旨、手紙を書いたんで、告知は十分だと思ったんだが」
「その手紙というのも読んでないぜ」
「うん。書くには書いたんだが、惜しいことに投函を忘れて下宿の机の上に乗ったままだ。切手も貼ってあるから、下宿の婆さんが気が付いてくれれば、いずれ着到するだろう」
「その必要もあるまい」
「そうか。婆さん宛に、投函の必要なしという葉書を出してもいいんだが、すでに投函してしまっていたら、行き違いになるからな」
「じゃあ投函したかどうか訊ねる葉書を出したらよかろう」

「うむ。考えておこう。しかし、君は思ったより元気そうだね」
「もう、だいぶよくなった」
「東京へ戻らないのかい」
「戻ろうと思っているんだが、そのたびに思いがけないことが出来して果たせないでいる」老師と幻子のことである。
「そうか。まあ、暑い東京に戻ることもあるまい。秋の新学年から学校に出ればいいだろう」（注：当時の大学は、9月に新学年が始まる制度だったようである）
相変わらず妄亭は呑気そうである。彼の呑気さが、こちらの神経によく作用してくれればいいが、時に呑気すぎて苛々することがある。妄亭は続ける。
「さて、僕もしばし、君とともにこの湯に逗留せんとするところだが、君、食い物は何を食っているんだ」
「自炊している」と自分は答えた。
「なに、自炊？それじゃ、ろくなものが食えなかろう。いけないぜ。そりゃ神経衰弱なんぞ治りっこない。うまいものを食って肉体と精神を頑健にしなくちゃならん。といっても、こんな山の中に、ろくな食い物もあるまい。西洋料理を出せと言っても、碁盤の上に大仏を据え付けてくれと要求するようなものだろう。だが、安心したまえ。僕が、ここへ来る途中、乗換駅のT市で一番大きな近江屋という食料品店に行って、毎日、牛肉と三鞭酒（シャンパン）と麦酒を届けるよう誂えてきたから」
「そんな事して大丈夫かい。僕にゃ金なんかないぜ」
「神経衰弱の君が心配する事じゃない……お、下で呼んでいる。近江屋さんからお届け物だそうだ」

そういって妄亭は立ち上がって、階段を下りていった。自分は、その豪勢さに呆れていた。そういえば彼は金はありそうである。資産家のM男爵家と親戚に当たるようなことを言っていたような記憶がある。

「僕が乗った軽便の一本後で持ってきたんだね。感心だ。麦酒とシャンパニエは冷やしておくよう言いつけておいた。葱と豆腐もそう言ってきた。散歩でもして一風呂浴びた頃には、丁度いいだろう。君、行こうじゃないか」

なんだか、目の前の空気が急に膨らがって来たような気がした。妄亭が福の神に見えてきた。もう自分の飯に辟易していたところだ。

いい気分で谷添いの道をゲエテだのルソオだのニイチェだのショオペンハウエルだのの人名が出てくる話をしながら散歩した。妄亭は「人物の偉さはヘソの大きさに比例するという説があるぜ。ちなみにツルゲネフのヘソは」と話した。それでも宿に戻ってくる頃には、だいぶ賢くなったような気がした。

それから、風呂に入った。妄亭のヘソの大きさは見忘れた。

「牛肉は鍋にするのとビフテキにするのと交互に持ってくるよう言いつけたんだ」

と、湯の中でも、あくまで肉体上の問題を精神上のことより優先する方針のようであった。それから、

「U君が細君を持つという話を聞いたかい」

と学友のうわさ話に移った。

「知らない。僕らはまだ学生だし、家庭なんぞ持てるものか。第一、Uのやつは本郷の西洋料理屋でカツレツを八枚も平らげたやつだぜ」

「カツレツを何枚食おうが、結婚に関係ないさ。UはO県でも有数の旧家だそうで、もう東京へ出て来る前から決まっていた話なんだそうだ」

名家とは、窮屈なものだと自分は珍しく自分の身を幸せに思った。
「Uのことを考えると、僕らも出来れば早々に家庭を持つべきだと思うんだ」
妄亭が、Uの何に刺激されたのかわからぬが、妙な方向に話が行く。
「あの、君の部屋に世話に来る女中だが、あれは君の係なのか」幻子のことか。
「係だか知らん」
「あれは美人だ。君、そう思わないかい」
「美人なんだか、わからん。変なことばかりする。毎朝、僕を起こしに来る」
「細君でもないのに？」
「細君なものか。女中にしても変だぜ。今朝は、起きると天井から蒟蒻が吊してあった。起き抜けにももんがあに顔を舐められた気分だ。昨日は、足の指を洗濯鋏で摘まれて飛び上がって起きた。一昨日は、鼻の下に辛子を塗られて、一日中、吸う息がひりひりして参った」
「明治の婦人だけあって個性的だな」
「個性的か知らぬが、ちょっと頭がおかしいんじゃないか」
「だが、どうも物腰に洗練の風がある。どこの娘さんだろう」
「東京の下谷あたりの大店のご隠居の孫娘だと自称している」
「大店のご隠居？」
「僕の部屋の隣に滞在する爺さんだ。これも変なじじいで、僕はどうやって、あの二人から逃れようかと……」
そこまで言うと、急に妄亭が湯をばしゃつかせて叫んだ。
「君、じゃあ、僕があの女中さんに求婚してもいいね。君は僕のライヴァルじゃないわけだ！」

自分は驚いた。幻子は美しいのかしらん、と不思議に思った。よくわからないでいるうちに、その晩は大宴会になった。妄亭の着到記念だそうで、主唱も主催も主客も妄亭だ。

妄亭はT市から、牛肉だの魚だの缶詰だのチイズだの御馳走を大量に追加するよう騒ぎ立てた。その随所にM男爵の名前がほのめかされたようである。そのために軽便鉄道の臨時便が出たらしい。

何故か自分の部屋が宴会場になり、隠居と幻子はもちろん、温泉宿の主人や番頭やあらかたの女中や湯治客までいた。それどころか、山寺の和尚、小坊主、軽便の機関手、村内名所巡りの御者等々、確か自分の部屋は八畳敷きだったと思うのに、なんで、こんなに人が入れるんだろうと思うほど、混雑していた。維摩居士の方丈には、途方もない数の仏が出入したと言うがこんなもんだろうか。

三鞭酒がパンと開き麦酒がポンと抜かれ、座が乱れ人々がはしゃぐ。幻子は小坊主と話しながら牛肉をぱくついている。美人かどうか知らぬが食欲は並以上にある。

妄亭は、にやけた顔で盛んに老師に酒を勧めている。孫娘をくれとでも話しているのだろうか。馬鹿馬鹿しい。

なれない三鞭酒のせいか、麦酒や正宗の飲み過ぎか、頭がぼんやりして妙に白けていていて妙に憂鬱だ。妙に寂しい。耳元で、妄亭が「僕は求婚するよ、するよ」と言ったような気がする。幻子は妄亭の妻になるのだろうか。

夜中にぎゃーという、人間のものとも獣のものとも判じられない声を夢うつつに聞いた。

翌朝は、自分の腹を台の代わりにして、老師と幻子がとらんぷで遊んでいるという起こされ方をした。ばらばらと札を振り落とすと、酒が残っている頭を掻きながら浴場へ向かった。

戻ってくると、床はあげられ掃除も済んで、床の間に封書が置かれていた。妄亭からである。

「急ながら事情があって失敬する。秋に会おう。あの女中には気をつけ給え。柔術や忍術を使う。ひょっとしたら妖術もだ。酔った勢いで、求婚するべからず。特に入浴場付近ではいけない。是非、別の女にしたまえ、悪いことは言わぬ」

騒いでいたのは妄亭じゃないか、と二枚目をめくると、

「追伸：近江屋への払い、立替えを頼む。余はこの夏、すぐにA画伯のお供で箱根、その後はB子爵の招きで大磯、またその他の交際で席の暖まる暇なく、為替を組む暇もあるべからず。秋に学校でお返しする。よろしくお願い申し上げる」

自分は青くなった。なんだか、自分を下界と隔てる壁がもう一枚出来たような気がした。途方に暮れていると、幻子が

「一番の便で着いた手紙だそうです」

と別の封書を持ってきた。また妄亭である。が、ここに見舞いに来ると書いた手紙が、今ごろ着いたのである。彼の下宿の婆さんは、完全に忘れてしまったわけではなかった。

妄亭は、食料品店・近江屋の支払いだけでなく、この宿への支払いも踏み倒していった。

金持ちの癖に一文無しでここへ来たのかというと、さにあらず、例の大宴会の夜、宿の帳場から女中から飯炊きから下働きから湯治客に至るまで、酔った勢いで有り金全部、祝儀に振る舞ったらしい。

お陰で妄亭は宿のものには粋で気前の良い若旦那、という印象を残して去っていったのだが、何故か宿代の苦情は自分の方に持ち込まれることになった。

「あの御友達の宿代はどうしていただけるんですかね」

しきりに番頭が談判にやってくる。「あの御友達」と発音する時は祝儀を思い出すらしく、うっとりとした顔になるのだが、「どうしていただけるんですかね」の部分に来ると渋面になって自分を睨みつける。どうも彼の頭の中では、妄亭が天使で自分が悪鬼であるという誤解が大手を振って往来しているようだ。

近江屋からも小僧が毎日のように取り立てにやってくる。妄亭の借金のために責め殺されそうになっていたところ、うまい話がやってきた。

この土地の素封家の息子が県下の中等学校の生徒で来年、高等学校を受験するつもりらしい。現在、夏期休暇で家に戻っている彼の勉強を見てもらえないかという話である。その報酬で宿代も近江屋も片付けることが出来るし、多少の贅沢も出来るかも知れない。

溺れる者は藁をもつかむ。そもそも何故自分が溺れているのか釈然としないが、出来得ることはそれしかない。自分が、その話を首肯すると、宿と近江屋の番頭

が抱き合って喜んだ。

幻子が廊下を小走りにやってきた。部屋の敷居のところで膝をついて、なにか切なげな顔をしている。「どうした」と聞くと、やっと口を開いて

「お客様が……」

と言ったきり、こらえきれなくなったらしく、

「ひーひっひっひっひ」

と床に突っ伏して笑い出した。

何事かと思うと、後から仏頭が現れた。ただし首から下は詰め襟の学生服という姿である。甚だ暑苦しい。

巨大な頭である。鎌倉の大仏を困らせるとこういう顔になる。本当に、あの大仏が心配事を胸に歩いてここまでやって来たのかと思うくらいである。にわかに、この八畳が狭くなったように感ずる

「僕は大佛（おさらぎ）太郎と言います」

と言って頭を下げた。彼は神妙にしているのだが、頭の大きさだけが彼から独立しているが如くに、自分の方へ迫ってくる。

その頭に圧倒されながら、もし彼が首尾よく一高に入学して藤村操君のように煩悶にとらわれても、まず首吊りの方を引き受けてくれるような丈夫な枝はそこらにはあるまい、また、華厳の滝に赴くにしても、この頭を中禅寺湖まで運ぶ前にどこかで引っ掛かってしまうだろう、などと推測していた。

幻子が茶を持ってきた。彼女も頭の中味はともかく外観は妙齢の女性である。その女性に、しとやかそうに茶を勧められて、太郎君は膝をますます固くし、顔

を真っ赤にしている。「うーっ、うーっ」と呻っているようでもある。なんだか自分がガラス職人の親方になって、大きなガラス玉を吹いているような錯覚にとらわれる。

「茶でも飲みたまえ」

と勧めてみるが、変わらず下を向いたまま苦悶の体である。幻子は盆を胸に抱いたまま、何か面白そうだという顔をして部屋の隅に座ってしまった。この女は女中ということだが、なんだか遊んでばかりいるように見える。

相変わらず苦しげに黙っているので、

「教科書や参考書は持ってきているのかい」

と自分から話を進める。彼は、どきっとしたように震え、傍らの風呂敷包みから幾何と英語の本を取り出した。それをめくっていると、故郷のお寺の本堂の隅っこを借りて勉強した頃が思い出されてくる。その頃の自分とこの巨大な仏頭が重なり……難いが重なってくる。純情そうであるし、何とかしてやりたい気持ちになってくる。

「ともかく夏休みは不得手としているところを片っ端からやっつけてやろうじゃないか」

と元気づけるつもりで言葉を掛けてやると、うーっと呻っていたのが、やっと人間らしい口を聞いた。

「ぼ、僕、親父に殺されてしまうかも知れません」

なんだか声が黄色くなっている。それればかりでなく、膝の上に握っている手の上に、ぼたりぼたりと汗ではなく涙がこぼれ落ちだした。尋常ではない。幻子の方は、そら面白くなってきた、と前のめりになって太郎君を観察している。

「そりゃ、どういうこったい」
「ずっと高校に落ちたら腹を切れと言われていたんです。なんせ、我が大佛家は旧幕時代には名字帯刀を許された旧家である。その家の跡取りが受験に失敗するとは家名を汚す所業であるから腹を切れって」
「そりゃ、乱暴だ」
藤村操君になる前に命を落としてしまう。
「ところが、今回、先生の指導を受けるにあたって、『いいか、東京から来た書生なぞに笑われるようなことがあってはならんぞ。もし、一問でも出来ない問題があれば腹を切れ。だが、その前に笑いものにした書生も生かしてはおくな』って……」
自分は、無理に意識下に押し込んでいた嫌な物体を意識せざるを得なくなった。
「太郎君、さっきから、君の持ってきたもうひとつの包みが気になっていたんだがね……」
彼の膝の脇には、参考書を入れてきた風呂敷の他に、細長い風呂敷包みがあったのである。
「はい……そうなんです」
そう言いながら風呂敷をほどくと、脇差が一本出てきた。
「お、おいっ」
「はい。一問でも出来ない問題があったら、これで先生を切った後、自決しろと……」
宿代の近江屋のと言っている場合じゃなくなってきた。命に関わりかねない。
幻子は、目を輝かせて成り行きを見守っている。

「君のお父上は、よほど名家意識が強いらしいな」
「もとは、そうじゃなかったんです。なんせ養子ですから」
「養子？」
「はい。気が弱くて、妻や姑からの、つまり僕から見れば、母や祖母からの苛められ方は、子供心にも可哀想なくらいでした。それが、数年前、母と祖母が相次いで亡くなった頃から、おかしくなったんです」
「つまり、家の権力を握った頃からってことか」
「はい。まるで生まれながらの大佛家の人間だったかのように、家名を振りかざし始めて、僕にも『必ずや一高、帝大を出て、国家枢要の地位につき、華族の娘を嫁に迎え、大日本帝国に大佛家ありと天下に示し』……」
「そりゃ、たいへんだねえ」
「さも、なければ腹を切れ、と」
「随分、武張ったお父上なのだねえ」
「とんでもありません。自分は、ちょっとトゲが指に刺さっても命に関わるような大騒ぎをする人で」
「そりゃ馬鹿馬鹿しい。お父上には、僕から、どうなりと報告するから、そんな脇差は仕舞い給え。だいたい、それじゃ勉強も頭に入らんだろう」
「でも、親父のことです。どこに、見張りの者を潜ませているとも限らない……」
思わず幻子と眼があった。意味ありげに笑って自分の鼻の頭を指さす。こいつが忍びの者とは思えないが。

なんだか、暗い雲の下で勉強をしているような按配になった。太郎君の巨頭に影が差したようで、ゲエテのワルプルギスの山嶺を連想する。

太郎君が躓きそうになると、自分がヒントになりそうなことを呟いて、なんとか正解に導く。横では、幻子がにまにまと笑って、時々脇差に目をやる。

この日、最後の難問にかかる。太郎君が本当に大仏と化してしまったかのように動かなくなる。自分もヒントをほのめかすのだが、太郎君の巨大顔面は、ふたたび巨大ガラス玉となって膨れあがる。

「先生、僕、駄目です……」

「いーや、そんなことはない、ほらっ、ほらっ」

斬り殺されては大変なので、身ぶり手振りも含めてヒントの発信に努める。その時、

「備前長船武満……いい出来じゃのう」

という老師の声が聞こえた。どうせ、幻子が呼んだのだろう、いつの間にか入って来て、太郎君の脇差しを手に取って見ている。自分で老師と呼んでおいてなんだが、嫌な人が出てきた。

「幕末の江戸で、無頼漢達と斬り合ったことが、目の前に蘇ってくるようじゃ。明治の御世でこそ商家の隠居じゃが、年は取っても腕に年は取らせぬ。大佛家当主のご命令は、拙者がお手伝い申し上げよう。書生さん、太郎君、構わぬから、そこへ首を並べなさい。切れたか、とも思わぬうちにあの世に送ってあげるよ」

もう鞘を抜いて構えている。はい、どうぞと言って首を差し出すわけにはいかない。

「まだ、問題が解けないと決まったわけじゃありませんから」

「臆したな！貴様ら日本男児か！恥を知れ！」
　老師が太郎君に向かって脇差しを振り下ろした。太郎君の巨大な頭が西瓜の如く切り下ろされ、辺りは血の海に……なるかと思ったら、備前長船の脇差が太郎君の頭にあたって、ぼきっと音がして、二つに割れてしまった。
「竹光じゃよ。太郎君、持ってみてわからなかったのかい」
「だって僕、刀なんて、持ったことなかったんです」
「あ～あ、江戸は遠くなりにけりじゃな。しかし、お父上も、大仰なことをおっしゃる割には、いざとなると気弱じゃのう」
「はあ……養子だからでしょうか……」
　お父上の気弱が何に原因するのかわからぬが、気弱でよかった。
　ほどなく、そのお父上がやってきた。ああ言ったものの、本当に息子が腹を切ったらと思うと心配で心配で、じっとしていられなくなったようである。

7

「お目覚めに……なりましたか……」
　暗闇の中に、蝋燭が二本、灯っていて、ゆらゆらと動いていた。蝋燭の光りの間に、髪をおどろに振り乱した女の顔があるのがかすかにわかる。起きようとしたが、腕も足も鉄の棒になってしまったように動かない。声も、喉が潰れたように出てこない。金縛りというのだろうか。
「朝には、まだ早うございます」
　言うなり女の半身が、こちらに覆い被さってくるように思えた。それにつれて自分の目蓋もまた、否応なく閉じていった。暗闇が戻っても、まだ何処かで蝋燭の火がちらついているように思える。ぎりぎりぎり、と何かが擦れるような捻れるような音が聞こえた。
　まるで身体が宙に浮いているようで、心細い。どちらの方角かわからぬが、にわかに非常な風が吹いてきた。かまいたち、と自分はとっさに思った。身体が闇の中で錐もみをする。上も下もわからなくなる。ぎゃーという叫び声が聞こえる。

「やあ、書生さん、おはよう」
　と、老師の声が離れたところから聞こえる。気が付いてみると、明るくなっている。目に宿屋の建物の二階が映じている。ただし、逆立ちをしている。その二階の廊下に浴衣を着た老師が立ってこちらを見ている。これも逆立ちをしている。老師の脇の障子の向こうから、やはり逆立ちをした幻子が、物干し竿ほどの長さの竹の太いのや、削いだようなのを何本も担いで現れた。片方の手には鋸や縄を

持っている。
　自分は、自分の部屋の外の正面に生えている木に、逆さになってぶら下がっていたのである。
「おや、今朝は、その竹でバネ仕掛けを拵えて、書生さんを跳ね飛ばしたのかい。書生さん、怪我はないかね」
　まだ怪我があったかどうか確かめる余裕もない。夢かと思っていたが、昨晩の蝋燭の女は幻子だったらしい。夜中に忍び込んで、かなり大掛かりな仕掛けを作っていたと見える。掛け布団も、廊下の欄干に引っ掛かっているのが見える。
　老師や幻子の悪戯には、だいぶ馴れたとはいうものの、そろそろ逃げ出さないと命に関わりかねんな、と逆さまになった頭で考えた。今までは、試みるたびに二人に妨害されていたのだが。

　その日も、大仏顔の大佛太郎君の勉強を見てやった。勉強が終わると、彼は頭をきちんと下げて、紙に包んだ謝礼を置いていく。おかげで、例の妄亭に端を発する借金問題はあらかた片づいた。
　太郎君は来るたびに東京に関する質問をする。その時、ふと彼を同道して東京に向かえば、さすがに邪魔はされないのではないか、という考えが浮かんだ。
「僕は、もうすぐ帰らなきゃならんのだが、どうだい、その時、一緒に来て東京を見物しては」
　太郎君の顔が一瞬、ぱっと明るくなった。自分はそれを見逃さない。
「いずれ、高校に入れば東京で暮らさなければならないだろう。それなら、少しでも見聞していった方が後のためになる」

と押してみる。
「でも……」と、明るくなった太郎君がまた沈んだ声になる。
「勉強の方は大丈夫さ。君の学力なら、合格間違いなし。僕が請け合おう」
本当の学力がどうあれ、東京に引っ張っていくまでは、やる気をなくされては困る。
「大学構内を案内してやろう。電車にも乗せてやろう。銀座を見物しようじゃないか。西洋料理も御馳走してやる」
「でも……僕の父は、そういう東京の軽薄な空気に染まるのは好ましくない、っていうんです」
「だって、末は帝大を出て国家枢要の人物になるんじゃなかったのかい」
「だから、ここから東京へ毎日通えばいいって言っているんです。太政官の乗るような立派な専用の馬車を買ってやるから、それで通えって」
「そんな重要人物があるか」
この機会をとらまえなければ生涯東京に戻れないような気がした。そこで、お父上をご招待して説得することにした。と言っても場所はこの部屋だが、近江屋に言って牛肉の良いところを奮発することにした。
翌日の夕方、早速、お父上はやって来た。幻子に給仕をしてもらうことにした。老師は呼ばなくても、御馳走の匂いを嗅ぎつけて勝手にやってきた。
二人をおびき寄せたのにはわけがある。大佛のお父上に太郎君の東京行きを納得させてしまえば、それがそのまま老師と幻子に、もう邪魔はさせないぞという宣言にもなる。
自分はお父上に恵比寿麦酒を注ぎながら、説きに説いた。世界と日本の趨勢、

世の中の動きは日進月歩であること、国家的人物たるためには早くから東京に馴れることが肝要であること、華族の娘を嫁さんにするためには等々。お父上は腕組みをして考えていたが、

「わかりました。ですが、大佛家としても、それなりの準備が必要です。何日か、ご猶予を下さい」

せいぜい数日乃至一週間東京に行くのに大げさであると思ったが、自分は首肯した。

老師と幻子から逃げる、じゃなかった太郎君を東京に案内する日がやってきた。自分は支払いも済ませ、帳場に祝儀も渡して、清々した気持ちで玄関の椅子に腰掛けて、太郎君が迎えに来るのを待っていた。老師と幻子が見えなかった。

外が騒がしくなった。太鼓がどかどか鳴る。ラッパがキイキイ響く。大太鼓と小太鼓とシンバルとトロンボンとトランペットの５人の楽隊が、明治３５年に作られた田中穂積作曲『美しき天然』を演奏するのの後ろから、それこそ太政官でも乗りそうな黒塗りの馬車が静々と続いてくる。御者は、金モールのたくさん着いた上着に、大きな羽根飾りの付いた帽子を被っている。

あっけにとられていると、中学校の制服を着た太郎君とフロックコートにシルクハットというお父上が降りてきた。

「いや、山の中とて、これしきの物を揃えるのに手間が掛かってしまいましてな」

「あの、準備というのは、このことだったんですか」

「さよう。息子を東京にやろうというのに、大佛家としてみっともないまねはできませんからな。後ろの馬車には爺やと婆やが乗っております」

ふと見ると、後ろにも同じような馬車が続いている。
馬車が動き出すと、沿道に連なった村人達から万歳の声が上がった。みな、手に日の丸と大佛家の家紋の入った小旗を以て振っている。楽隊の音楽は『宮さん宮さん』に変わった。自分は、下を向いて外からあまり顔が見えないようにした。

楽隊は軽便の停車場まで山里に楽の音を響かせっぱなしであった。もっとも、曲は『美しき天然』と『宮さん宮さん』しか出来ないらしい。
停車場には、大勢の人が集まっている。入り口には、「祝・大佛太郎君、東京見物出発」という横断幕が掛かっていた。
人混みの中に、老師と幻子もいた。老師は、紋付きの羽織袴に扇を手にして立っていた。その横の幻子は、紫の袴をつけ、革の編み上げ靴を履いて、髪にリボンを飾っている。
機関車にも、リボンや花が飾られ、正面には「大佛太郎号」という大きなヘッド・マアクがついている。
すぐに乗れるのかと思ったら、ホームに並ばされた。
まず、国旗掲揚があった。続いて、ホームに置かれた台の上に村長というのが上って祝辞を読み始めた。
「この度の大佛太郎君の東京見物は、誠に壮挙であり快挙であり、万感胸に迫るを禁じ得ないのであります」と言うようなのがあって、「大佛太郎君の東京見物に実り多からんことを祈って、ばんざーい」と万歳三唱があった。周囲の人も万歳を繰り返しているので、自分も万歳をした。太郎君は、あたりに向かってぺこぺことお辞儀をした。

その後、驚いたことに「書生さんの前途を祝して」と万歳三唱があった。村長さんは、これでも物足らないらしく、さらに「日露戦役大勝利万歳」と「大日本帝国万歳」を続けてやった。そのたびに、人々の両手が上がったり下がったりする。

これで汽車に乗れるかと思ったら、まわりは直立したままである。今度は、村の校長先生というのが台に上がって演説を始めた。内容は、壮挙であって快挙であって感涙禁じ得ず、と前とあまり変わらない。そして、太郎君と自分と日露戦争大勝利と大日本帝国に向けて万歳三唱があった。

このあと、村のなんとか長というのと、かんとかの世話役というのと、どうとかの理事長というのから、快挙の壮挙のと言う祝辞があり、万歳三唱が繰り返された。

続いて余興、ということになり、何があるのかと思ったら楽隊が出てきて『美しき天然』と『宮さん宮さん』を演奏した。

へとへとになって客車に乗り込んだ。いやに社内が狭苦しいと思ったら、太郎君ばかりか、お父上も乗り込んでいる。さらに爺やと婆やも乗っている。呆れたことに楽隊まで乗り込んでいる。小さな箱の中に人間が充満している。

それだけならいいのだが、汽車の始動とともに楽隊が演奏を始めた。目の前でトロンボンが伸びたり縮んだりする。耳の横でシンバルがはじける。太鼓が雷様のように暴れる。そして『美しき天然』と『宮さん宮さん』が繰り返される。

目の前が真っ赤になるような思いをして、T市の駅に着いた。ここで、官営鉄道の汽車に乗り換える。ホームに降りると、自分の影が青く見えた。

お父上の計らいで、生まれて初めて一等車に乗ることになった。夏の青々とした田んぼがどこまでも広がる中、汽車は快走する。どんどん東京が近づいてくる、と思った。

それはいいのだが、お父上も爺やも婆やも楽隊も一等車室に乗り込んでいる。見送りはT市までかと思っていたので、乗ってきた時は少し驚いた。発車ベルが鳴れば降りるだろうと思っていると、まるでそういう気配がない。ついに汽車はそのまま動き出してしまった。発車と同時に楽隊が演奏を始めたが、さすがにそれは車掌に止められた。

実に久しぶりで、本郷西片町の下宿に帰ってきた。だが、なぜか六畳一間の部屋には、人がひしめいている。太郎君と父上と爺やと婆やと楽隊が膝を縮めるようにして小さくなっている。

「なんで、付いてきたんですか」

「いやあ、息子が心配で」

「なにも、こんな大勢で来ることはないでしょう」

「大佛家の格式からして、これくらいしないと沽券に関わる」

「もとから太郎君は引き受けるつもりでしたが、他の方は宿屋でも取ったらいいでしょうに」

「宿屋がどこにあるかわかりませんのでなあ」

自分は場所がないので机の上に座っている。下宿に帰ったと言うよりは、伝馬町の牢名主にでもなったような気がする。

8

今日は、大学構内をひとまわりして、その後不忍池に降りて蓮の花を眺めてきた。大佛太郎君とお父上と爺やと婆やと楽隊五人を引き連れてである。

のべつ誰かが迷子になりそうになる。楽隊がやたらに『美しき天然』と『宮さん宮さん』を演奏したがる。巡査が飛んでくる。巡査に怒られる前に、「演奏やめーい！」と怒鳴って回る。巡査には謝る。非常に疲れた。

そして、今日も全員が自分の下宿の六畳間に戻って、押し合いへし合い、ひしめき合っている。「うぎゃー」と爺やの声が聞こえた。部屋の何処かで誰かに押しつぶされたのだろう。

自分は机の上からお父上に問うた。

「なんで、ここにいるんですか。宿屋に移ったらいいじゃないですか」

「いや、そうしたいが、楽隊がここを気に入っているようだから」

なんで楽隊の要望が優先されるのかわからない。

夏の狭い部屋の中、人いきれに蒸し上げられているところへ、なんと妄亭が顔を出した。部屋の様子に一瞬ぎょっとしたようだが、

「帰ったな」と言った。

「おう、昨日の夜着いたばかりだ」

「そうか、元気そうで何よりだ」

と妄亭は隙間もなさそうな部屋にずかずかと入ってきたのみならず、どっかと胡座をかいた。どこかで、ぎゃーという声がした。また爺やが犠牲になったらしい。

「君、喜んでくれたまえ。僕はいよいよ結婚するぞ」
　そういえば妄亭は、あの湯治場に来た時も、そんなことを言って騒いでいたような気がする。あの時も、幻子に結婚を申し込むと言っていたが。
「あの湯治場の君、例の女中に、驚くなかれ、今日、上野で会ったよ」
「えっ？僕らは今日、不忍池にいたんだぜ」
　妄亭は「へえ」と言って、改めてあたりを見回して楽隊に目を留め、
「そうか、下の方から時々楽隊の音が聞こえてきたが、君たちだったのか。だが、僕の方は君たちみたいに気楽な話じゃないんだ」
　と人の気も知らないで、こちらを一方的に気楽と決めつけてから、
「僕は今日、上野の山の清水堂を散歩していたと思い給え」
「うん」
「あそこは、景色がいいからな。今日みたいな晴れた日は、こっち側は本願寺から待乳山、隅田川、はるかに筑波山も見えるし、反対側は池を挟んで本郷台、駿河台、ニコライ堂、目を転ずれば品川の海まで見渡せる」
「うん」
「また、あそこの茶屋に座ると、苦いお茶に羊羹の厚く切ったのを出してくれるんだが、その羊羹がまたうまいんだ。君、食ったことあるか」
「君は羊羹の話をしに来たのか」
「いやいや。僕が休んでいると、薄紫の涼しげな着物を着た女がやってきた。僕がひょいと見ると、例のあの女だ。下谷の商家の娘だとか言っていたようだが、本当かも知れんな。僕らは、あまりの奇遇に呆然としてしばし見つめ合ったよ」
「それで」

「すると、あの女が茶屋に言いつけて、筆と料紙を取り寄せて、さらさらさらと書いて僕に渡すんだ。その中味がこれさ」

と妄亭は懐から短冊を取り出した。「瀬をはやみ　岩にせかるる　滝川の」としてある。

「これは、崇徳院の歌だよ。下の句は『われても末に　会わんとぞ思う』というのだ。つまり、今は本意なくお別れしますが、いずれまたお会いします、という心を表しているのだな。その時の気持ちを想像してくれ給え。もう僕は、ぼうっとしてしまって、それから何がどうなって、どこを歩いてきたのかわからない。気が付いてみたら、君の下宿の傍にいた……」

「しかし、変だな」

「何が変だ」

「彼女が君のことを好きなら、別にそこでお別れしなくてもいいじゃないか」

「何か用事があったんだろう」

「だいたい君は、湯治場でもプロポオズしたんじゃないか

「うん。まあ、あれは失敗だ。君にも言っておく。いくら逆上したからと言って、柔術を使う女を風呂場まで追い掛けていっちゃいかんよ」

「もうひとつ変なことがある。昨日、僕らが東京へ出発をする時、彼女は僕らを見送ってくれた。僕らが東京に着いたのは夜だ。あの後に東京に向かう便なんてないだろうに、何故、今日、早くも東京にいるのだ」

「だって、いたんだもの。しょうがないじゃないか。こうなると僕は、明日にでも彼女を訪問したい」

「家がわかっているのか」
「わからん。ぼうっとして聞くのを忘れた。僕としてはうかつだったが、ここへ来てよかったよ。楽隊がいるじゃないか。これを使って、例の歌を宣伝して歩けば、必ず見つかるだろう」
「なんだか、落語の『崇徳院』みたいな話だな。だいたい楽隊は僕のじゃないぜ」
妾亭は狭い中、ぐるりと大佛のお父上の方に向き直って談判を始めた。ところどころでM男爵の名前をちらつかせたようである。しばらくして、まとまったようで、
「じゃあ、僕は今日はここに泊まらせてもらう」
と横になってしまった。不可能事としか思えないことをやってのける。どうせ、どこかで爺やがまた、圧迫を受けているのだろうが今度は声も上げない。もう、誰がどうなって寝ているのかわからない状態で夜を過ごした。

宮さん宮さんが鳴り始める。その間に、「瀬をはやみ」という歌を読む声が聞こえる。だんだん離れて小さくなって、ついに聞こえなくなってしまった。確かにあれなら人目を引くには違いない。
自分は一人部屋に残った。大佛家は全員、妾亭の幻子捜索について行ってしまった。久しぶりに一人になって、ほっとした。ようやく東京に帰ってきた気がした。
二晩、わけのわからん姿勢で寝ていたので、畳の上に大の字になって、うんと背伸びをした。
ひと眠りして、目を覚ますと誰かが見下ろしている。ぎょっとして目をこすると、その顔が幻子の顔になったので、ますますぎょっとした。

「な、なんで君がいるんだ」
「大変、失礼しました」
と幻子は珍しく神妙に頭を下げた。
改めて対座すると、大変もじもじして見える。湯治場とは別人のようだ。
「昨日、上野で妄亭と会ったのだそうだね」
「はい……」
言葉が少ない。埒が明かないので、自分が続けた。
「ここは、どうやって知ったんだい」
「今日歩いていると、妄亭さんのご一行が歌を唱え太鼓やラッパを鳴らしながら歩いてくるのに会ったんです」
「ほう。今日も会ったのかい」
「でも、慌てて傍らの木に登って隠れてしまいました」
隠れ方だけは幻子らしいが、
「君は、妄亭に会いたかったんじゃなかったのかい」
幻子はそれには答えず、
「後に、こんなビラが落ちていましたので、こちらがわかったのです」
幻子が差し出した紙を見ると、連絡先としてこの下宿の住所と自分の名前が書いてある。
「妄亭のやつ、人の名を勝手に使いやがって……しかし、君は妄亭に崇徳院の歌を渡したんだろう」
「はい。でも、それは半分だけなのです」
「知っている。下の句が書いていないのだろう」

「いえ、そういう意味ではなく、もう一首書いてお渡しするつもりでしたのに、妄亭さんたら最初の一首を受け取っただけで、ふらふらと歩いて行かれてしまって、お渡しできなかったのです」
「それは、どんな歌なの？」
「そ、それが……」
と赤い顔をして下を向いてしまった。不思議なこともあるものだ、と自分が下から顔を覗き込もうとすると、
「いやーっ」
と叫んで自分を突き飛ばし、部屋から走り出てしまった。自分は、机の向こうの開いた窓から転げ落ちそうになって、窓枠に足を引っかけてかろうじて転落を逃れた。この辺は湯治場で訓練を積んできている。
そろそろと身体を部屋の中に戻していると、
「やあ、書生さん」
と言って、今度は老師が入って来た。
「先生、あなたも東京に帰っていらしたんですか」
「わしは、孫娘と一緒じゃよ」
「あの時、僕らを軽便の停車場で見送っていたはずですが」
「急に孫娘が東京に行きたいと言い出したので、発車間際に、機関手の吾作に頼んで客車の屋根に乗ったんじゃよ」
幻子とその祖父だけのことはある。「T市からは、三等に乗ってきた」
「じゃあ、僕らと一緒に着いていたんですか。ここは、やはりビラで？」
「孫娘はそうらしいが、わしは湯治場にいる時から調べはついていた」

「どうやって？」
「君の部屋に下宿から転送された郵便物が置いてあった。その表に書いてあるんだもの」
「そんなもの見なくてもいいじゃないですか」
自分は少し機嫌を悪くして言った。
「いや、すまない。しかし、孫娘の未来の旦那様だと思うと、思わず知らず……」
「へ？」
自分は、きょとんとした。老師は笑って、
「孫娘が妄亭さんに渡したかったもうひとつの歌というのは左京太夫道雅『今はただ　思ひ絶えなむとばかりを』だ。心は下の句にある。『人づてならで　言うよしもがな』、人づてではなく、直接申し上げる方法はないものか、直接会ってお話ししたい、その思いを妄亭さんに運んでもらうつもりだったんじゃな」
「じゃあ……別れても末にお会いしましょう、という相手は妄亭じゃないんですか？」
その時、「いやーっ」という声とともに、幻子が飛び込んできた。階段の下から「ちょっと待って下さい」という妄亭の声が聞こえる。幻子は部屋の中に隠れ場所を探していたようだが、ないと見切るや、机に足をかけて二階の窓から飛び降りた。驚いた自分が窓から覗くと、足袋はだしの幻子が道を走っていく後ろ姿が見える。あの着物で、よくあの動きが出来るものだと感心していると、今度は妄亭が後ろから自分の背中と頭を踏み台にして飛び出していった。「わーっ」という声が聞こえて、下を見ると妄亭が気絶していた。
大佛家一同が後からようやく階段を上ってきて、部屋の入り口に立って、こち

らを覗いている。
　老師は自分に向かってぺこりと頭を下げて言った。
「孫娘をよろしく」
（完）